ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.79　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2020 年 3 月

主な記事

国際島嶼教育研究センターと平成の時代（桑原季雄）　p1
国内客員研究員フィールドレポート　p3
「奄美大島のコウモリを追いかけて」（浅利裕伸）
「奄美大島産植物からの医薬品開発を目指して―
「ピーピー草」とその可能性―」（平田美信）
「柄の成り立ち～龍郷柄にガジモシャを追って～」（内山初美）
学生奮闘記「『ヨソモノ』であるということ」（勝濵直椰）　p7
フィールドこぼれ話「フェリーとしま」（安藤匡子）　P21
連載　世界島めぐり　第二回　「クック諸島」（河合　渓）　P22

国際島嶼教育研究センターと平成の時代

共通教育センター　桑原季雄

私と国際島嶼教育研究センター（以下、「島嶼研センター」）との関係は、平成に始まり、私と国際島嶼教育研究センター（以下、「島嶼研ほぼ平成の時代（1989～2019）と共にありました。私は、平成 2（1990）年 5 月に、旧教養部の文化人類学担当教員として着任し、ほどなく当センターの前身である南太平洋海域研究センター（以下、「南海研センター」）の兼務教員となり、以来、今日まで当センターと深く関わってきました。この間、私は、南海研センター（1988-1998）の 8 年間と、多島圏研究センター（以下、「多島研センター」）（1998-2010）の 12 年間、さらに現島嶼研センターとは 10 年間をともにしてきたことになります。

平成の最初の 10 年間は南海研センターの時代にあたり、水産学部の練習船「敬天丸」や「かごしま丸」を使った総合学術調査研究がメラネシアやミクロネシアで盛んに行われました。平成の次の 10 年の多島研センター時代も、練習船を使った調査研究が引き続き行われ、私も平成 9（1997）年 4 月に旧教養部から法文学部への移籍後に、練習船による調査に参加する機会を得ました。最初に参加したのは、平成 11（1999）年のヤップ本島での調査で、その次が、平成 13（2001）年のヤップ州ウリシー環礁での調査でした。このヤップでの調査体験を通して島嶼研究に導かれました。平成 14（2002）年以降、水産学部の船を利用した調査はできなくなりましたが、その後もチューク環礁やポンペイ、コスラエなどのミクロネシアの島々での調査プロジェクトに参加し、島嶼研究と共同研究にどっぷり漬かりました。

一方、当センターの鹿児島県島嶼の最初の研究は、平成 11（1999）年の『薩南諸島―21 世紀への挑戦―』の出版でしたが、本格的な調査研究に向かうのは多島研センターの時代でした。その時期に当センターのプロジェクト部会のメンバーとなり、平成 16（2004）年度と平成 17（2005）年度に薩南諸島の調査研究プロジェクトを立ち上げました。また、平成 22（2010）

年4月に多島研センターが島嶼研センターに改組されたちょうどその頃から、プロジェクト部会で、鹿児島県の島嶼に関する英語版の論集をシリーズで出版するプロジェクトが企画されました。その成果として *The Islands of Kagoshima*（2013）、*The Amami Islands*（2016）、*The Osumi Islands*（2017）が刊行され、本年度末と来年度末にはトカラ列島と甑島列島に関する英語版論集が上梓される予定です。これによって鹿児島県の島嶼全体を網羅した英語版の論集がひとまず完結することになります。

しかし、私にとって、当センターを通して得られた最大の成果は、学内外の様々な研究者との出会いです。特に海外の研究者に関しては、これまで、私と専門を同じくする多くの人類学者が客員研究員として来学し、大きな刺激になりました。なかでも、1995年度の客員教授の米国タルサ大学のラモント教授とは今日まで親交が続いています。ニュージーランド、ヴィクトリア大学のベズニエ教授（1999年度）とは、喜界島での学生実習にお誘いした縁で、ゼミ生を引率してウェリントンのベズニエ教授を訪問し、グアム大学のルービンシュタイン教授（2001年度）とはヤップ州ウリシー環礁の調査に一緒に参加した縁で、ゼミ生のグアム島での実習にも協力していただきました。また、ニュージーランドのオタゴ大学のジョンソン教授（2012年度）やオーストラリアのマコーリー大学のヘイワード教授（2016年度）、ニュージーランドのユニテック大学のパポサキ教授（2017年度）とは、奄美群島での多くの共同調査研究を行うなかで、私自身が奄美研究に目を開かれるという経験をしました。私の鹿児島大学での研究生活の半分はこれらの外国人客員研究者との共同研究によって占められ、島々での共同調査、国際学会での共同発表、論文の共同執筆等々、国際共同研究の醍醐味を存分に味わうことができました。

このように、当センターとの縁がなければ、鹿児島大学の他学部の様々な研究者や、上述の海外の研究者との出会いも共同研究もなかったことを思うと、私にとって、当センターとの出会いは、私の研究人生にとって最も貴重な出来事であったと言えます。本年3月の定年退職にあたり、当センターの今後益々の発展を願っております。

ヤップ州
ウリシー環礁の
敬天丸

ウリシー環礁での
学術調査

国内客員研究員フィールドレポート

奄美大島のコウモリを追いかけて

帯広畜産大学　環境農学研究部門　浅利裕伸

奄美大島で「野生動物の研究」というと、多くの人はアマミノクロウサギが頭に浮かぶと思います。私もその一人で、ここ最近はアマミノクロウサギの交通事故（ロードキル）対策に関する研究や採食物の季節変化について調べています。しかし、アマミノクロウサギの研究に関わる前から継続して調べている動物がいます。それは“コウモリ”です。ちょっとしたきっかけで 5 年ほど前に奄美大島に立ち寄った際に、島内を案内してもらう中で野生動物（哺乳類）の研究がほとんど行なわれていないことを知りました。特に、コウモリに関しては数種が生息しているという情報しかありませんでした。コウモリは夜行性で多くの種が小型であるため、普通に生活していると見つけることはまずありません。研究では、コウモリの超音波を聞く機械や捕獲によって生息する種や分布を知ることができますが、奄美大島ではこのような調査がほとんど行なわれてきませんでした。日本に生息する小型のコウモリは、森林内や河川で昆虫を捕食し、樹洞や洞穴などをねぐらとしていますが、大規模な森林伐採といった開発による生息環境の変化は餌不足やねぐら環境の消失などコウモリへの影響を与えます。

その影響を評価するためにも島内の現状を明らかにしておく必要があることから、私は島全域において生息種と分布を調べることにしました。2 年ほどかけて概ね全域で捕獲調査を行ない、過去の資料と合わせて少なくとも 8 種が生息していること、北部での生息種が少ないことなどを明らかにしました。また、生息種の中にはこれまで知られていない種の存在も明らかとなり、現在種の同定を行なっています。前述したとおり、コウモリは人の目につきにくい生き物でありますが、種によっては民家や小屋の屋根裏や壁の隙間など、意外と身近な場所に暮らしています。山林ではトラップを用いて生息種と分布を調べてきましたが、民家などに生息する種の情報を得る必要があります。そこで、新聞に情報を求めるコメントを掲載したり、ビラを一軒一軒配って回ったりしたところ、いくつかの新しい生息場所を教えていただいたこともあります。

私は現在、コウモリの生態を明らかにするための発信機調査、アマミノクロウサギの生態調査も実施しています。明らかになった知見は研究成果として発表するだけでなく、ぜひ島の方々にも島の生き物の面白さを伝え、島の財産として思ってもらえればと考えています。

トラップで捕獲されたリュウキュウテングコウモリ。林の中をひらひらと飛翔しながら昆虫を食べて暮らしています。

発信機を装着したコウモリの追跡調査風景。追跡しているこのコウモリは小屋や建物などもねぐらとしています。

奄美大島産植物からの医薬品開発を目指して
―「ピーピー草」とその可能性―

株式会社アーダン　研究開発職 平田美信

生物多様性がうたわれる奄美大島。医薬品開発として有効な動植物が存在することをご存知だろうか？例えば、奄美大島にのみ自生する「ワダツミノキ」は、抗がん剤原料であるカンプトテシンを含有している。有用植物である反面、絶滅危惧種に指定されているため、増殖に向けた栽培方法が検討されている。医薬品開発のアプローチとして、伝承薬用植物の利用がある。今回、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター客員研究員として、私自身が幼少期に鼻づまり解消に「ピーピー草」と呼び利用していた植物に着目し、その学名と薬理活性を研究した。地元奄美大島産の植物が医薬品として羽ばたく可能性があるのか、得られた知見を報告する。

「ピーピー草」は水辺や湿地に自生し、独特の芳香を漂わせる植物だ。葉をもむことで強く匂いを発し、その葉を丸めて鼻に数分詰めることで、鼻づまり解消効果がある。「ピーピー草」と呼ぶ名前の由来は忘れたが、ありがたい民間療法で、鼻づまりが解消された時には母の手料理がとても美味しく感じられた。

幼少期に「ピーピー草」を採取していた龍郷町秋名で植物の生育を観察した。その結果、5月頃に上部の葉が緑色から白色へ変化し、可憐な花が咲く事に気づいた。色彩変化を含め植物の専門家に話を伺い、鹿児島大学総合研究博物館の植物標本と比較することで、該当植物はドクダミ科に属するハンゲショウ「半夏生、半化粧、学名 *Saururus chinensis* と判明した。ハンゲショウは利尿作用や腫れ物の治療に利用されるそうだ。地理的分布面では、鹿児島県本土には同じドクダミ科のドクダミとハンゲショウが自生しているが、奄美大島にはハンゲショウのみが自生している、という面白い発見をした。同植物を認知している地元の方も多く、また絶滅危惧種指定でもないが、自生地帯に他の植物が増殖するとハンゲショウの生育が阻害される様子が確認されたため、今後減少していくと懸念された。

鼻づまりに効くその作用を調べるため、まず香気成分の分析を実施した。すると、今回の分析結果は既存の研究報告と「異なっていた」。その理由が、産地由来または別要因なのか考察する必要はあるが、実に興味深い結果が得られた。得られた香気成分と鼻づまり解消のメカニズムを調査するため、抗菌活性・免疫関連の研究を予定していた。なぜならば、鼻づまりが生じるメカニズムとして、細菌感染経路に的を絞ったからだ。しかし、評価系の確立と香気成分の含有量を数値化することが困難だったため、薬理評価には至らなかったが引き続き挑戦していく予定だ。

また、成人 T 細胞白血病の治療薬としての可能性も視野に入れた。成人 T 細胞白血病（Adult T-cell Leukemia: ATL）とは鹿児島県を含めた南九州で多発する血液がんである。複数の抗がん剤を併用する化学療養や先進的な治療薬が開発されているが、生存率が低く副作用の影響が大きいことから、新規治療薬の開発が望まれている。地元の植物から ATL 治療薬の開発！という夢のある挑戦をした結果、ハンゲショウの抽出物成分（香気成分ではない）が良好な結果

を示した。これは有望な第一歩である。医薬品開発では、数百から星の数ほどのサンプルを調達して試験を実施し、有用なサンプルを絞り込む。ハンゲショウの抽出物成分から良好な結果を得られたことは、さらに有用な資源が眠っている可能性を示唆している。そのため、奄美の天然物資源として、植物および近年世界的に研究が盛んな海洋生物も対象とした網羅的スクリーニングを実施する意義は非常に高い。その中から、医薬品開発へつながる可能性の高いサンプルを選択し、抗がん効果を有する化学物質及びがん細胞殺傷メカニズムを解明していきたい。奄美産資源を様々な分野の研究者が分け隔てなく協議・検討し、学術的面白さの探求そして産業として芽が開くような研究活動を一人の奄美出身者として、微力ながら尽力できたら本望である。

写真左）上部の葉が白く色づいているハンゲショウ

写真右）鹿児島大学で蒸留法を用いて香気成分を採取している様子

柄の成り立ち～龍郷柄にガジモシャを追って～

あまみーる店主　内山初美

約十年前龍郷町の文化財保護審議会委員の中田一男氏（1934～2019）に出会い、「龍郷柄の原点は、アダンの葉で作ったガジモシャ絵図だった。」と教えられた。ガジモシャとは、風車(かざぐるま)の事で、昔の子どもたちの身近な遊具であった。昭和半ばに子ども時代を過ごした私もアダンの葉でガジモシャを作って遊んだことをよく覚えている。あのガジモシャが龍郷柄の原点なのかと、龍郷柄の柄をまじまじと見るようになり、柄の起こりに興味を持つようになった。大島紬を研究するにあたり、その成り立ちや、歴史、柄に関する文献が少ない中で、龍郷町誌・歴史編に記載されている中田氏が書いた「本場奄美大島紬―龍郷柄の変遷」は、それまで私が読んだどの文献よりも、龍郷柄について詳しく書かれていた。しかし、近年龍郷柄の説明をする際に、ソテツの実や葉、ハイビスカス、ハブなどをモチーフにしたという多くの異なる説が雑誌や関係各所の HP に記載されてあり、今一度「アダンの葉で作ったガジモシャ(風車)」の説とそれ以外の説を深く考察することにした。

中田氏は龍郷町誌の中で、明治 33 年ごろ織られたという 13 枚の紬の見本と 2 枚の図案を考察している。その図案にガジモシャ（風車）と説明があり「図案の中心にある図柄はアダンの葉で作ったガジモシャ（風車）であり、それが二重に組み合わされ発達してソテツ葉模様を生み、ソテツ葉柄と呼ばれた。そして、その後このソテツ葉模様は龍郷柄の基礎になった。」

と述べている。

その他の文献を読み解く中で、一番古い文献は、明治 28 年に笹森儀助が本土での紬の流通促進の目的で作った「大島郡織物概集」であり、その中に「風廻し」と名のついた絣見本が掲載されていた。また、和泊町誌「衣服―絣」の中に「カザモーシャ」や「カジモーシャ」と書かれた絣見本が掲載されており、与論町誌の「民族・言語」の中にも、手書き図案と共に「風に舞う風車のこと」記されている。

その他の説（ソテツの実や葉・ハイビスカス・ハブ）の調査は、文献や奄美に現存する展示物や新聞、雑誌、パンフレット、ホームページなどを調べてみた。龍郷町のホームページでは、「ソテツの葉とハブを図案化した細かい連続模様」と記されており、龍郷町観光ガイドブック、奄美パークの龍郷柄の説明文には、「ハブの背模様とソテツの葉を図案化した柄」と記載されていた。

鹿児島県立短期大学地域研究所編「大島紬の研究―経済・科学・デザイン」には、ソテツ葉模様とハブ柄の考察があり、ソテツ葉模様は、「文様の主題となるよりも、他の柄を引き立て、空間を埋める補助的な役割をもっている」と記されていた。ハブ柄については、嘉渡出身の川口安太郎氏が「ハブ」が動いている様子を図案化したもので、蛇行線上の形状の中に「イェンム（魚目）」「ガジャマシャ（風廻）」「ソテツの葉」などの絣文様を組み合わせて完成させている。また、ハブ柄の製品化は大正 10 年と記されていた。前述の龍郷町誌には、龍郷柄と呼称されたのは、明治 40 年の頃だったと記されているので、ハブ柄が完成したのは龍郷柄の完成の 15 年ほど後くらいであることがわかる。

風廻しやカザモーシャ、カジモーシャといったような言葉が頻繁にでてくることと、どの絣見本も同じような形状をしているところをみると、やはり龍郷柄の原点はガジモシャ（風車）といえるのではないだろうか。

私が調べた中では、龍郷柄がハイビスカスやハブ、ソテツの実をモチーフにしたという説を論じている書物は見つからなかった。これは、現代の龍郷柄を主観的に見て捉えた、誰かの「ハイビスカスやソテツの実に見える。」、「ハブの模様に似ている。」との意見が、いつしか人伝えに広まり、定着していったのではないだろうか。

現代社会においては、インターネットによる情報の拡散が著しく、一度 SNS に情報が載ってしまえば、情報の出所が定かでなくても、いとも簡単に広まり、一般化してしまう。大島紬についての古い書物に存在しなかったハイビスカスやソテツの実、ハブの説がそのいい例である。しかし、この時代に生きる私たちだからこそ、歴史を掘り下げて学んだ情報を、SNS を利用して共有し、世界に発信していくことも可能なのである。今後も大島紬の柄の研究や古い大島紬の収集を続け、ガジモシャを知らない次世代にも大島紬の魅力を伝えていきたい。

龍郷柄を考察する筆者

学生奮闘記

「ヨソモノ」であるということ

勝濵　直椰（農学部国際食料資源学特別コース 2 年科）

硫黄島で活動を行っている。硫黄島といっても、『硫黄島からの手紙』などで有名な東京都の「いおうとう」ではなく、鹿児島県三島村に属する「いおうじま」である。鹿児島市からフェリーで 4 時間、現在も活発に噴気を上げる人口 100 人余りの火山島だ。硫黄島を初めて訪れたのは昨年の春休み。温泉によって変色した赤褐色の海や、大海を臨む東温泉、水蒸気を吐き出す壮大な硫黄岳に魅かれた。何よりも、片道 3000 円以内（学割利用）、往復 1 泊 2 日で非日常を味わえるという手軽さが決め手になった。寒さの残る早春の晩に東温泉に浸かりながら星空を眺めたことは、強烈に印象に残る体験となった。

鹿児島大学の有志学生、教員とともに「薩南諸島勉強会」を立ち上げたのはその直後のことだ。全国有数の多様な自然や文化が残る鹿児島県の島嶼部について学び、最終的に地域に成果を還元することを目的とした勉強会である。学部も出身も異なる 3 人のメンバーが、皆、硫黄島を訪れていたという共通点をもとに、偶然生まれた集いだ。現在までに、島々での現地調査や勉強会などを行っており、三島村との共同による 2019 年度「鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム＜地方創生活動部門＞」（進取の精神 CP）にも採択された。

進取の精神 CP では、メンバーの海外在住経験や留学生との交友関係、専攻分野の知識を活用して、硫黄島へのインバウンド呼び込みをテーマに活動している。今年度は留学生を含む学生メンバーで訪島、島に少ない若年層や外国人の視点から島の魅力を再発見して、観光情報を多言語に翻訳することを活動の中心とした。2020 東京オリンピック・パラリンピックの際に三島村がギニア共和国のホストタウンに指定されていることや、ユネスコ無形文化遺産、日本ジオパークへの登録などによる来島外国人の増加が見込まれるため、情報提供による観光客の利便性の向上やトラブルの未然防止への貢献を目指している。

一方、訪島を通じ、私が島のことを十分に理解できていない「ヨソモノ」でしかなかったことを痛感したとともに、私たちの活動が誰のための地域貢献であったのか深く考えさせられた。100 人余りの島民の中でもインバウンド対応に対して温度差があり、言葉が通じない外国人観光客の呼び込みよりも、村道の除草や伝統行事の継続といった生活に密着した課題への対応を切望する声も知った。つまり、何を地域の「課題」とするかは、主体によって異なっていたのである。

将来は農村開発に関わりたく考えている私にとって、この経験は良かれと思ったことがありがた迷惑になるかもしれないことに対する衝撃とともに、開発の在り方について今一度考え直す良い機会になった。今後も、私自身が「ヨソモノ」に過ぎないことを常に心にとめつつ、活動を通じ当事者たちの考えるきっかけとなる存在になりたい。

図 1. 硫黄島港にてジャンベの演奏を体験する学生メンバー。フェリーみしまの離着岸の際に島民による演奏が行われる。

図 2. 恋人岬にて記念撮影を行う留学生。写真映えのする景勝地が多く、留学生からも好評であった。

島嶼研シンポジウム
「新たな技術で喜界島の未来を考える」

令和元年 10 月 12 日（土）に島嶼研シンポジウム「新たな技術で喜界島の未来を考える」が喜界町役場研修室兼会議室において開催されました。当日は多くの方々にご参加いただき、盛会となりました。

趣旨

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターは、平成 27 年 4 月に国際島嶼教育研究センター奄美分室を奄美市に設置し、奄美群島により密着した教育研究を開始しました。奄美分室を設置以降、奄美市にてシンポジウムを年 1 回開催し、奄美群島の遺跡や島唄、産業などに関する最新の研究成果を地域に還元してきました。活動のさらなる活性化にむけて、本年度は喜界島にて当センターのシンポジウムを開催します。日々進歩する研究手法や新技術から得られた知見をもとに、喜界島の現在と未来について考えたいと思います。

1)　最先端の浅海底地形図づくりとその活用

菅　浩伸
（九州大学浅海底フロンティア研究センター）

人口やインフラが集中する沿岸域は防災上重要な場所であるとともに、観光や漁場としての利用も盛んな場所である。しかし、沿岸域の目の前に広がる浅海域は、その重要性にもかかわらず詳細な調査が進んでいない。私が専門とする地形学（自然地理学の一分野）でも、氷期に干出し間氷期に水没する深さ百数十メートル以浅の浅海域について扱われることは少ない。2016 年 12 月に九州大学に設立した浅海底フロンティア研究センターでは、沿岸浅海域の精密な海底地形図を作成した上で新たな学問領域を開拓すること、自然科学から人文・社会科学に至る広領域の学際研究を推進することを主な目的としている。

本報告では、我々が行っているマルチビーム測深技術を用いた高精密浅海底地形図作成と、それに基づく研究事例を紹介する。例えば、石垣島名蔵湾は我々が大規模な沈水カルスト地形を発見した海域であるが、これまでサンゴ被度が低いと予想されるなど環境面での評価が著しく低かった海域でもある。ところが、海底地形図を基にした現地調査を実施すると大規模なサンゴ群集が見つかるなど「高く評価される海」へと変化した。また、石垣島屋良部崎沖では、17～18 世紀に港として利用され多くの遺物が残る海域について、詳細な海底地形図を作成することによって当時の港利用の実態が明らかになった。

喜界島は日本で最も地形・地質学的研究が進んでいる隆起サンゴ礁の島である。我々は喜界島でも浅海底の調査を行っているところである。本報告では、その一部についても予察的な結果として紹介する。

菅　浩伸氏

2)　サンゴが語る喜界島の記憶

渡辺　剛
（北海道大学大学院理学研究院／
喜界島サンゴ礁科学研究所）

サンゴ礁は“海の熱帯雨林”や“海のゆりかご”といわれるほどの多種多様な生物が生息している。一般に、熱帯、亜熱帯海域は貧栄養で生産性が低いとされているが、サンゴ礁では造礁サンゴとその体内に生息する褐虫藻が織りなすミクロコズム型（准閉鎖生態系）の物質循環システムがサンゴ生態系の豊富な生産性を支えている。また、造礁性サンゴの堅い骨格は複雑な三次元構造をなしサンゴ礁に生息する生物に安定した棲みかを与えている。造礁サンゴの骨格は、炭酸カルシウム（アラレ石）からなり、一年に数ミリから数センチメートルの速さで骨格を成長させ、やがて長い時間を経てサンゴ礁と呼ばれる独特の地形を形成する。造礁性サンゴの骨格は樹木のように年輪を刻みながら成長しサンゴが生息していた間に起こった様々なイベントや環境変動を記録している。

それらの生物地球化学的性質を詳細に調べることにより地球表層環境変動の履歴を詳細に復元することができる。このように年輪を刻みながら数百年間に渡って浅海で生息している長生きサンゴは海の「タイムマシーン」と言える。この海のタイムマシーンは、他のタイムマシーン（地質記録）と比べると時間解像度が極めて高い。工夫をすれば環境の一日の変化や季節の変化がわかる。時間解像度の高いタイムマシーンは、現在の人類や海洋生態系が直面している地球温暖化や二酸化炭素濃度の上昇、海洋酸性化といった百年スケールの問題、エルニーニョ現象など数年から数十年変動の気象現象、火山噴火や地震・津波といった短期間に起こるイベント現象をリアルなタイムで捉えることができる。

我々は、このタイムマシーンを駆使して様々な時代の現象を解明すべく、これまでに長寿の造礁サンゴを求めて世界各地を調査して来た。そして 2014 年に喜界島にサンゴ礁科学の拠点を形成すべく、喜界島サンゴ礁科学研究所を設立した。喜界島は、過去 12 万年間隆起を続けてその間の様々な時代と環境でサンゴ礁を形成してきた。その間に豊かなサンゴ礁生態系を支え続け、我々人類もその恩恵を受けながら特有の文化と歴史を育んでいる。喜界島の現在および化石サンゴがどのような記憶を語ってくれるのか、また、そこから得られる未来へのヒントはどのようなものかを日々考えながら、サンゴとそのサンゴが創りだして来た島を調査して来た。本講演では、その一旦をご紹介してサンゴとサンゴ礁生態系、そして人間活動とのこれまでと今後の関係について議論をしたい。

渡辺　剛氏

3)　さとうきび農業スマート化のための衛星リモートセンシング

神田英司
（鹿児島大学農学部）

奄美群島は鹿児島県の約 14%の面積を占め、耕地面積は 17 万 ha を有し、温暖な気候に恵まれ、さとうきび、野菜、肉用牛、花き、果樹等を組み合わせた農業が営まれている。なかでもさとうきびは栽培面積 8,285ha、生産量約 34 万トン／年であり、基幹作物となっている。現在、さとうきびの刈取り作業は機械化が進み、ハーベスターによる収穫率が 70%を超えるようになってきたが、植付け作業への全茎プランタ、ビレットプランタの導入はまだ限定的であり、

経営体の高齢化などによる栽培管理不足による単収の低下が問題となっている。このため、「南西諸島域のサトウキビ産業の高度化に向けたプロジェクト」を 2018 年度より開始し、喜界島、徳之島、沖永良部島の 3 島の衛星リモートセンシングによるさとうきびの成育推定および徳之島 3 町のさとうきび畑に設置した気象観測装置による生育環境データ収集を行っている。このプロジェクトでは衛星リモートセンシングによる全島における栽培型別生産面積の把握の試み、生育状況の把握、台風被害の推定、製糖工場の計画的な操業のための全島的な生育状況、収穫状況の準リアルタイム把握、畑地かんがい水利用促進のための効果の検証、生産環境データを利用した収穫量推定や糖度推定を試みている。本報告では、さとうきび栽培のスマート化につながるこれらの試みについて概説する。

神田　英司氏

シンポジウムでの討論風景（奄美分室と Skype 中継）

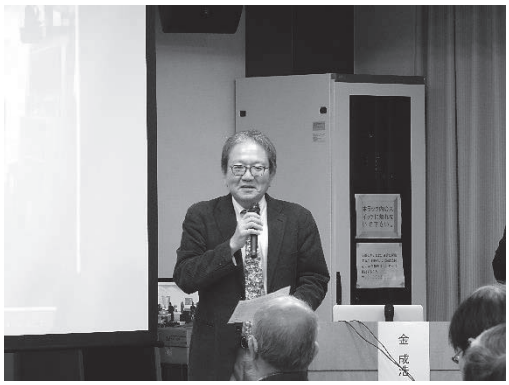
鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「鹿児島で北東アジアを考える」

令和元年 12 月 21 日（土）に鹿児島大学重点領域（島嶼）シンポジウム『鹿児島で北東アジアを考える』が鹿児島大学連合農学研究科棟 3 階会議室で開催されました。参加された方々は熱心に発表内容に耳を傾けていました。

趣旨

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点との共催により、北東アジアの国際関係と地域秩序（セッション 1）と島嶼・海域問題の国際比較（セッション 2）をテーマとしたシンポジウムを開催します。鹿児島は、いわゆる本土の最南端に位置し、東シナ海や太平洋に開かれた「ゲートウェイ」ともいえる地です。中世には中国、朝鮮、東南アジアとの交易があり、ポルトガルやスペインとの交流もありました。他方で、琉球侵攻とそれに続く奄美・琉球支配など「砦」としての役割も果たしました。このような鹿児島の歩みを思いながら、この地で北東アジアの地域としての未来に向けた議論を行いたいと思います。

河合　渓（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）による挨拶



岩下明裕（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）による趣意説明

セッション 1：北東アジアの国際関係：歴史、理論、比較

1)　北東アジア冷戦構造の変容と朝鮮半島

金　成浩

（琉球大学人文社会学部）

1980 年代前半、韓国は日本を通じて中国との関係を改善しようとした。その主な理由は、ソウルで開催予定のアジア大会（1986 年）、オリンピック（1988 年）の成功を目指したからである。韓国は「クロス承認」政策について具体的な方策を立案し実行に移していった。当時の韓国大統領であった全斗煥は、日本の中曽根首相に中国との仲介を求めた。そして、中国は、北朝鮮との関係を維持しながら韓国と非公式に接触した。一方で、北朝鮮は、韓国と中国の関係構築に脅威を感じ、ソ連との関係強化に乗り出した。したがって、この時期の北東アジア国際関係には 2 つの傾向があったことになる。1 つは、韓国、日本、中国、米国がより緊密な関係に向かう潮流であり、もう 1 つは、ソ連と北朝鮮間の関係発展であった。

しかし、チェルネンコの後を継いだゴルバチョフは、1985 年末から 1986 年半ばにかけて、中国および韓国との関係改善を模索しはじめた。その結果、1987 年末までには、北東アジアにおける北朝鮮の孤立が決定的となった。1988 年のソ連のソウル・オリンピック参加を経て、韓国は 1990 年にソ連と外交関係を締結した。こうした 1980 年代の北東アジア冷戦構造の変容は、北朝鮮の核開発の進展に拍車をかける結果にもつながったのであった。

金　成浩氏

2)　北東アジアの安全保障秩序：米中関係と米同盟ネットワークの相互作用

佐橋　亮

（東京大学東洋文化研究所）

私たちは、アジア太平洋秩序から平和と繁栄を享受してきた。その中核には、地域主義の発展や国際ルールの浸透だけでなく、日米中三カ国関係の安定があった。すなわち、米中接近、

日中国交正常化がおきた 1970 年代以来、米中関係の安定、日米同盟の維持、日中関係の基本的な安定が、この地域の秩序に平和的性格を与えた。日中関係の対立や地域における主導権争いはあったが、それは米国の役割を再確認する結果につながった。

米国は中国の台頭がもたらす意味についてブッシュ（子）政権から本格的な検討を政府内で行うが、それは中国にアメリカへの対応意思をもたせないように力を見せつける「諫止」と呼ばれる動きであり、米同盟ネットワークの強化であった。しかし、それらの取り組みにより米中関係を安定化させようという意図が強かった。アジア・ピボットを唱えたオバマ政権でもその構図に変化はなかった。米同盟ネットワークは米中関係と矛盾せず、互いに補完する関係にあるという理解は、中国の海洋進出の前に安全保障をより強く意識していた、中国近隣に位置する日本やアジア各国とのギャップさえ生んだ。

佐橋　亮氏

米中対立が激しさを増す今日、これは地域諸国にとって平和的秩序の動揺という問題を引き起こしている。アメリカが中国に過度なほどに強硬にでているとの懸念は多くの国が共有している。

他方で、日中関係は米中関係とは異なり、むしろ改善の兆しも見える。日米安保体制は堅持されているものの、これまでと全く異なる三つの二国間関係の展開がみられる。

日米中関係の変動はなぜ起きているのか。それは歴史的にいかに位置づけられるべきか。そして地域秩序に与えるインパクトはどれほどのものか。本報告で検討する。

3)　地域対話におけるモンゴルの役割 : 欧州の経験から

宮脇　昇

（立命館大学政策科学部）

徹底した分断と激しい対立を特徴とした冷戦期欧州の経験から北東アジアが学ぶことは何か。それは非同盟・中立諸国が東西の架け橋になった歴史である。フィンランド、スイス、オーストリア、ユーゴスラビア等の N+N 諸国は、東西欧州の安全保障と協力をアジェンダとする CSCE において、東西対決による会議延期や米脱退論を退ける力となった。翻ってアジアでは、北東アジアの安全保障と協力を議論するウランバートル対話（UBD）が CSCE/OSCE を範として始動してはや 5 年以上が経つ。モンゴルはフィンランドやオーストリアのような役割を北東アジアにおける果たすことができるのか。東西ブロックのような意思決定システムがない北東アジアにおいて、「対話の交差点」としてのモンゴルの役割を考える。

宮脇　昇氏

尾崎孝宏氏（鹿児島大学法文学部）によるコメント

益尾知佐子氏（九州大学比較社会文化研究）によるコメント

セッション１討論の様子。バックのスクリーンでは Skype で奄美分室へ中継

セッション２：島嶼・海域問題の国際比較

4)　分断の島キプロス：紛争と統合の狭間

伊藤頌文

（慶應義塾大学大学院法学研究科）

東地中海の島国キプロスで長らく続く民族紛争は、ヨーロッパにおける最も「凍結された」紛争として知られる。事実上の分断が固定化されて以来、半世紀が経とうとする現在も未解決であり、再統合に向けた交渉は進んでいない。キプロス紛争は平和構築論や紛争研究の立場から論じられることが多いが、大国の権力政治や脱植民地化、ヨーロッパ統合など様々な側面から多数のアクターが利害関係を有しているという側面もある。その意味で、東地中海の小さな島国をめぐるこの問題は、同地域の国際関係とも深く相互作用している。

キプロスはヨーロッパ連合（EU）の加盟国でもあり、統合ヨーロッパの内部に存在する分断国家として特異な立ち位置にある。また、民族的な同質性から重要な利害をもつトルコとの複雑な関係もあり、EU 加盟国であること自体が紛争の解決を一層困難にしているという逆説も生じている。本報告では、キプロスをめぐる重層的な分断と統合の諸相を明らかにするとともに、従来の論点とは異なる切り口から、キプロス紛争の在り様を検討してみたい。

伊藤頌文氏

平井一臣氏

5)　鹿児島と琉球のはざま・奄美―島尾敏雄のヤポネシア論再考―

平井一臣

（鹿児島大学法文学部）

作家・島尾敏雄は、奄美にゆかりの深い作家として有名である。島尾が特攻隊員として過ごし、妻となるミホと出会った加計呂麻島の呑之浦には記念碑と墓碑もあり、鹿児島県立図書館奄美分館には、島尾のコーナーが特別に設けられている。文学研究における島尾研究にはそれなりの蓄積があるだろうし、島尾のヤポネシア論や琉球弧論については、主として民俗学や人類学の分野で検討されてきた。ここで改めて島尾のヤポネシア論を取り上げるのは、彼のユニークな考えが、1960 年代から 70 年代にかけて形成されたものであることに着目するからである。ちょうどこの時期は、高度成長の時代にあたるとともに、沖縄の復帰運動が激しくなり、そして復帰へと至る時期でもある。島尾のヤポネシア論は、当時のそうした時代性が反映したものではないのか。であるとしたら、それはどのようなものなのだろうか。この検討を行うことを通して、高度成長による「日本」の急激な変貌、様々な議論を巻き起こしながらもその日本に復帰していく沖縄、この両者を「奄美」という地点から捉えようとした島尾の知的営みの意味を読み取れないだろうか。

6)　竹島／独島の属島と化される欝陵島

福原裕二

（島根県立大学総合政策学部）

欝陵（うつりょう）島は、韓国・ソウルとほぼ同緯度にあり、同じくほぼ同緯度に所在する日本海（東海）岸の街トンへの東方約 160km に位置している。竹島（独島）とは約 90km 程度離れており、実質的に韓国の人びとが生活を営んでいる場所としては最東端に浮かぶ離島である。面積は 72.91km^2、人口は 2017 年現在で 10,123 人を数える。従来、水産業（イカ漁）と農業（カボチャと山人参）が盛んなところとして国内では知られているが、最近では観光業が産業の中心となっている。

時代を遡れば、欝陵島は朝鮮王朝によって 15 世紀初め頃から 19 世紀終わり頃まで「空島」政策が敷かれた絶海の孤島だった。その間隙を縫って、17 世紀には鳥取藩の町人が竹嶋（欝陵島）で独占的な経済活動を行った。これ以降、日本の一部では、竹嶋が資源の宝庫として知られるようになり、断続的に渡航するものが後を絶たなかった。この際、当時松嶋と呼ばれていた現在の竹島／独島は、竹嶋へ渡島する際の津懸かり（目印）として利用されたに過ぎなかった。韓国政府が「独島は欝陵島の一属島である」と主張することには一理ある。

欝陵島に暮らす人びとがそこを「国境」の島であると意識するようになるのは、韓国政府が 1963 年から着手し始めた「欝陵島綜合開発」に

よってであろう。欝陵島綜合開発は、「外交国防上重要な位置にあり、周囲に豊富な水産資源を保有している欝陵島の開発事業を長期的で総合的に推進する」ために取り組まれた。「開発の必要性」としては、「本島は国防上前哨地または寄港地としてもとても重要な位置にあり、とくに独島は外交上特別な対策が要求される」としたものの、開発自体は建設部、農林部、商工部、保社部、交通部、内務部が主に参画し、港湾、水産物加工施設、電力、上水道、道路、航路標識、保健医療などの整備を行う極めて民生的な開発であった。国防に関わるのは、「独島対策」という名目で、「警備員の飲料水解決のために天水貯水及び濾過装置を施設する」に過ぎなかった。この開発が功を奏し、1960 年後半から 70 年代前半にかけて欝陵島は、「韓国でもっとも一人当たり所得の高い場所」となった。

そうした欝陵島が象徴的に「国境の島」としての転機を迎えるのは、2005 年のことである。韓国の海洋警察庁が島根県議会の「竹島の日」制定と日本民間団体による竹島上陸の試図を契機に、「竹島警備策を大々的に公開の場で論じ」始めるようになり、事実 2005 年 3 月 22 日に海洋警察庁は、国会で竹島領海警備強化策を公表することとなった。この頃から、欝陵島を訪れる国内の人びとは乗船時に住民登録証を提示しなければならなくなり、外国人はパスポートを提示しなければならなくなった。島内の海岸に近い場所には、軍用施設（哨所）が多数設置された。いわゆる「独島観光」もこのときに始まり、これを境に欝陵島の竹島／独島属島化が始まったと言える。

李明博大統領が韓国の大統領としては始めて竹島／独島を訪問した 2012 年 8 月以降、「欝陵島の属島」化は一層進行することになった。翌 2013 年には、「国土の果ての島マスタープラン基本計画」が施行され、それ以前から存在していた「独島博物館」（道洞）に加え、「捜討歴史展示館」（台霞）、「独島義勇守備隊記念館」（石圃）、「安龍福記念館」（石圃）、于山国記念館［仮称］（南陽、建設中）などの観光客向けの「独島教育・啓発」施設が乱立された。また、これに併せて、「国土の果ての島」の観光地化のための整備が進められ、「独島」を冠する宿泊所、ツアー代理店、飲食店などが島に溢れかえることになった。加えて、「竹島問題」が再燃するたびに、本土から「国境の危機」を憂える横断幕が持ち込まれるようになった。「独島観光」を運営するある人物は次のように言う。「日本政府はもっと独島に対する厳しい政策をとってくれないだろうか」。筆者が「なぜですか」と問うと、「独島問題が盛り上がると、欝陵島を訪れる人びとが目に見えて増え、独島観光に申し込む人が多くなるからに決まっているではないか」。この人は、大邱の旅行会社の職員である。

こうした欝陵島の属島化は、国家からの莫大な資金投下によって成り立っている。欝陵島は現在、どの島に設置されている郡よりも、一人当たりの交付金・補助金の額が高い。しかし、その資金は、元来その島に根付いて発展してきた産業の振興には使われていないようである。

水産業は先細りする一方である。欝陵島の属島化は、ある意味日本がきっかけを作り、政府や道が地元住民を半ば置き去りにし、「独島」を介在に「国境」の危機を背負わせる形で進んでいるように筆者には思える。

福原裕二氏

セッション 2　討論の様子。バックのスクリーンでは Skype で奄美分室へ中継

上原良子氏（フェリス女学院大学
国際交流学部）によるコメント

堀江典生氏（富山大学極東地域研究センター）
によるコメント

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 200 回　　2019 年 11 月 25 日

地域での暮らしを最期まで支える人材育成における離島の魅力

丹羽　さよ子
（鹿児島大学医学部保健学科）

金子　美千代
（元鹿児島大学医学部島嶼地域ナース育成センター）

我が国は、高齢多死社会、2025 年問題に対応するために、要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けることができるよう、それぞれの地域の実情に合った医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される体制、つまり地域包括ケアシステムの構築を喫緊の課題としている。我々は、この課題に応えるべく、文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」として平成 26 年度に採択された「地域の暮らしを最期まで支える人材養成―離島・へき地をフィールドとした教育プログラム―」を実施し、昨年度末

の5年間で46名の修了生を輩出した。今回は、本事業・教育プログラムの概要と背景、離島での実習の実際とその効果等について紹介し、地域での暮らしを最期まで支える人材育成の環境としての離島の魅力を考察したい。

丹羽　さよ子氏

金子 美千代氏

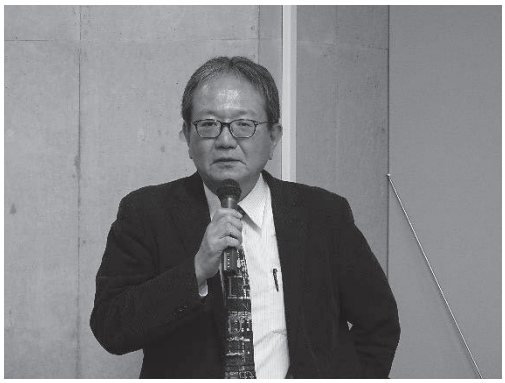
第192回　2020年1月27日

ボーダースタディーズと島嶼研究

岩下明裕
（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

ボーダースタディーズは、空間をどのようにとらえるかの問題意識を政治地理学と共有している。島嶼研究もまた島という空間を扱う学問ではあるが、「環海性」、「狭小性」、「字隔絶性」、「孤立性」などといった概念をもとに島という空間を規定しようとする。これらの概念は島を「ひとつ」としてとらえているようにみえるが、私たちはその考え方に疑念をもつ。例えば、北方領土はよく四つの島をくくるものとして通常語られるが、そのうちの「ひとつ」、歯舞は群島であり、本来、「ひとつ」ではない。例えば、対馬を「ひとつ」の島ととらえるのは正しいのだろうか。上対馬と厳原という四つの空間の歴史を振り返ったとき、これにはやはり無理があるように思われる。

ボーダースタディーズはこのようなクリティカルな問題意識から島嶼研究を脱構築し、再構築することができるのではないかと報告者は最近、思い始めている。ボーダースタディーズのもつ、三つの分析ツールである「タイムライン」「透過性」「社会構築」をもとに、島嶼なる空間の問題を考えてみたい。



岩下明裕氏

第193回　2019年1月15日

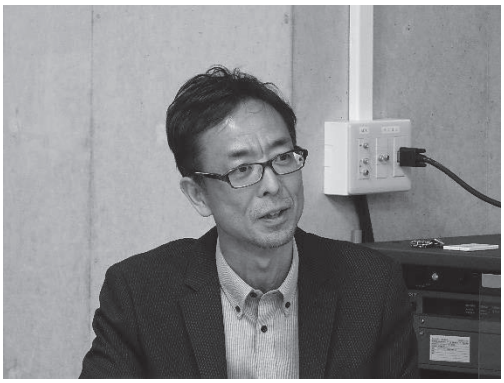
島嶼地域におけるソバの生産と6次産業化

坂井教郎
（鹿児島大学農学部）

ソバは痩せた土地でも短期間で生育し、多くの労働力を必要とせず、比較的長期の保管ができるため、かつては山間部を中心に栽培され、また鹿児島県内でも広く栽培されていた。その後、ソバの生産は衰退するが、1970 年代に減少の歯止めがかかり、2000 年頃からは、北海道・東北・北陸などの寒冷地を中心に面積が急増する。

こうした中で、自然条件の不利性に加え、輸送に日数・コストがかかる島嶼地域でも、生産・流通上の不利性が軽減されることから、ソバを生産する事例が見られる。また面積の拡大が制約されるなかで、ソバの加工・販売（6 次産業化）に取り組む島もある。

本報告では、全国のソバの生産・流通の状況について述べたあと、九州・沖縄の島嶼のソバ産地である対馬、種子島、宮古島、沖縄県大宜味村を対象に、その生産・加工・販売の実態と 6 次産業化の取り組みの特徴について検討する。



坂井教郎氏

特別研究会　　2019 年 3 月 4 日

ハブの進化–毒タンパク質の加速化–

服部政策

（東京大学医科学研究所
奄美病害動物研究施設）

ハブ（*Protobothrops flavoviridis*）はトカラ列島南部から、奄美大島、徳之島、沖縄島とその周辺離島に生息するクサリヘビ科マムシ亜科に属する毒蛇である。アジアに生息するマムシ亜科の中では最大種で、体長 2m、体重 2kg に成長する。行動範囲も広いために、奄美大島と徳之島で 1 年に 50 件近いハブ咬症が発生している。

ハブが 1 回に放出する毒液は 1ml もあり、多くのタンパク毒を含んでいる。その中で筋壊死活性を持つホスホリパーゼ A2 とそのアイソザイムには加速進化が確認されている。中でも、強い筋壊死活性を持つ塩基性アイソザイム 3 種はトカラ、奄美、徳之島のハブに特異的なもので、沖縄のハブには認められない。このように、中琉球の中でも島嶼別の違いが大きいことも他のヘビ類に見られない特徴である。島嶼別に認められる違いは、ハブ毒タンパク質の変異だけでなく、体色や外部形態、習性にまで及んでいる。これらの違いは中琉球の島々成立の地史を現在に伝えるものである。

世界自然遺産登録を目指す奄美大島、徳之島、沖縄島、西表島の生物多様性を特徴づける動物としてもハブとサキシマハブは重要な構成要素である。ハブは住民に被害を与える毒蛇であり、神様であり、生物資源の宝庫であり、観光資源でもある。今でも新しいことが次々と明らかになっているハブの現状を紹介する。

服部正策氏

特別研究会　　2020 年 1 月 9 日

父親になるか、ならないか：霊長類の複雄群におけるオスの繁殖の偏り

Antje Engelhardt

（リバプール・ジョン・ムーア大学生物学・
環境科学研究科）

血縁選択は社会関係において強い選択圧となる。したがって、同じグループの個体間における血縁度はグループの社会生活にとって重

要な意義がある。また、グループあるいは個体群の遺伝構造は保全の観点からも重要であり、近親交配は個体群の存続可能性を損なう。母系社会では、遺伝的多様性は主にオスの移籍パタンや繁殖成績によって決まる。複雄群で暮らす霊長類の場合、それぞれのオスがどれほど繁殖の機会を獲得し、それによって遺伝子プールに自身の遺伝子を残すかは、種によって実に多様である。このようなオスにおける繁殖の偏りの違いについて、その理由は未だに明らかでない。さらに霊長類において特徴的な点は、メスにおいて生殖に結びつかない交尾や性的シグナルの有無が多様であるということである。これらの形質は、霊長類におけるオス個体の繁殖成功に重要な役割をもつと考えられる。我々は、メスにおける性的シグナルの発現や機能、およびオスにおける繁殖の偏りに変異をもたらす潜在要因について、多くのマカク属種の比較研究を行ってきた。講演では、我々の研究成果について紹介する。

Antje Engelhardt 氏

お知らせ

(1) 着任

i) 令和 2 年 2 月 1 日赤井賢成さんが新たな特任准教授として着任いたしました。研究テーマは「希少植物の保全」、「地域協働による水環境保全・再生」で、専門は「保全生物学」、「植物分類・系統・地理学」「雑草学」です。今後、奄美群島を中心に「希少植物のモニタリング・生息域外保全・野生復帰」や「植物インベントリー調査」を展開されるほか、地域の担い手の育成にも関わっていかれます。

ii) Off-campus researcher (Oct. 1 to March 10)

My name is Franziska Weiß, I'm an undergraduate student at the University of Tübingen, Germany. My major is Ethnology (Social and Cultural Anthropology) and my minor Japanology. I have been at the KURCPI since October 2019 where I will stay until early March.

The reason why I decided to spent some time in Kagoshima and Amami is that I wanted to learn more about Japan's southern islands and their culture, and more precisely, because I intend to study the construction of social and cultural identity on those islands.

I strongly feel that KURCPI is the best place to study islands in Amami (and other islands in the world of course!) not only for professional scholars, graduate students but also for international undergraduate students like myself.

(2) 教員免許状更新講習

平成 28 年度より国際島嶼教育研究センターの教員で、教員免許状更新講習を行っています。今年度は奄美市で実施しました。日時と場所は 12 月 1 日（日）9 時～17 時、AiAi ひろばで、講習科目は「島嶼の自然と人びと」でした。講習では奄美群島やアジア太平洋における島の自然、人びとおよび文化に関する講義を行いました。14 名の参加者があり、アンケート調査によると多くの受講者が「大変ためになった」と回答していました。

AiAi ひろばでの教員免許状更新講習の様子

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol. 40, No.2, 2020

Research Papers

FUJIKAWA, M.: Differentiated Concepts of Home for Boat Dwellers in Southern Fijian, China

KAWAI, K., MORIWAKI, H. OKUNO, M. FUJIKI, T., MCCORMACK, G., COWAN, G. and MAOATAE T. P. : Shell Color Polymorphism in Populations of the Intertidal Gastropod *Nerita Plicata* (L., 1758) from the Cook Islands

～フィールドこぼれ話～

フェリーとしま

安藤匡子（共同獣医学部　病態予防獣医学講座）

私の初めての島嶼調査は、鹿児島大学に着任後 2 ヶ月の 2013 年 12 月トカラ列島の悪石島でした。調査の目的は、人獣共通感染症である「つつが虫病」を媒介する「ツツガムシ（の幼虫）」を探すことでした。ツツガムシ採集方法として野性動物（特にネズミ）を捕獲して吸着しているツツガムシを採る方法があります。ネズミからは、ツツガムシの採集だけでなく臓器から病原体を検出したりすることができるため、効率の良い調査ができます。以前から「ネズミ捕り」を実践的に習いたいと思っていたため、トカラ列島の調査があると聞いたとき「行きます！行きたいです!」と大興奮して参加しました。

そのときの調査参加者は、全国各地から総勢 10 名。ネズミ捕りベテラン 5 名、初心者 5 名（私もこちら）でした。トカラ列島には「フェリーとしま」に乗り、夜 11 時に鹿児島港を出港して翌朝に各島に入港します。「トカラに行く時は、フェリーに乗ってお酒を飲んで寝て起きたらもう島に下りるから。船酔いしないから酔い止め薬は必要ない」というベテラン先生からのアドバイスを真に受けてしまったのですが、往路は本当にそのとおりでした。

調査地は、トカラ列島の有人島である中之島、諏訪之瀬島、悪石島でした。順番に数名ずつが島へ下りていくのですが、悪石島に到着した時に初めて、自分が一番遠い島に送りこまれたことに気がついたのでした。初めての離島、初めてのトカラ列島・悪石島は、ベテラン先生達の冗談話を全て鵜呑みにしてしまうような不思議な魅力に包まれた場所でした。そんな島でのネズミ捕りは、本当にすごく勉強になりました。罠を仕掛けた翌朝、回収に出かける私達のうしろから、近所で飼われていたヤギがトコトコ歩いてついてきたり。そして捕らえたのはクマネズミ 2 匹。このときの調査では、中之島と諏訪之瀬島を含めてネズミは全部で 4 匹でした。なんて貴重で高価なネズミ達でしょう!

さて、復路のフェリーです。朝乗船して夜に着港なので、酔い止め薬をのもうとしたところ「それじゃ、本当に船酔いしないかわからないじゃないか!」とベテラン先生にまたしても止められました。そんな無茶な！と思いましたが、船酔いするか見極めるには絶好の機会だと考え直し、酔い止めなしで帰ることにしました。鹿児島につくのは夜だし、フェリーでは携帯も wifi も繋がらないしやることないし（本当はあるけど）、島で集めた材料の精査は明日からだしな～ということで、往路と同じ方法（お酒を飲んで寝る/お昼寝）を実践しました。そして、なんと、全く船酔いせずに帰り着いたのでした!

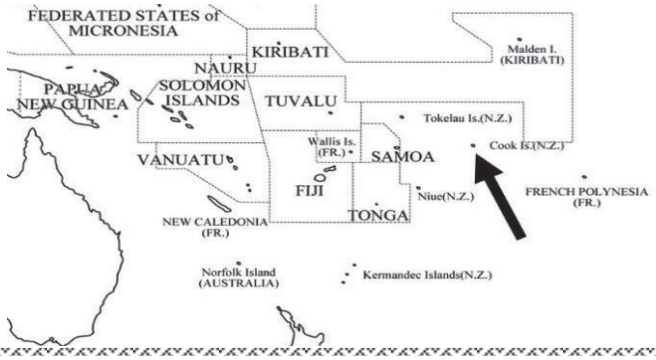
こうして、初めての島嶼調査により、ネズミ捕りを習い、トカラ列島に魅了され、「私は船酔いしない」と思い込むようになったのでした。ありがちな話ですが、実際にはその後はちょいちょいと船酔いしています。

フェリーとしま 2013 悪石島

『世界島めぐり』
第二回クック諸島
(Cook Islands)

河合　渓（国際島嶼教育研究センター）

有名なジェームス・クックの名が付く環礁と火山島から形成される島国。内政は独自に行うが、外交と防衛はニュージーランドが責任を負う。ニュージーランドからの観光客が多く、沿岸域には多くのリゾートホテルが建ち並ぶ。沿岸域の浸食が進みつつあり、人々沿岸生物にも影響が危惧される。



編集後記

昨年はじめて韓国を訪問しました。私の場合は海外の国へ行くときはほとんどが学会で、韓国では私関係の学会がほぼなく、ずっと訪問する機会がありませんでした。昨年は 6 月には済州学研究所との学術交流協定締結で済州島（島嶼研だより No.78 参照のこと）、11 月には第 7 回東アジア島嶼海洋文化フォーラムで釜山へいきました。いままで多くの国へ行きましたが、これ程違和感なく過ごせた国は初めてでした（言葉以外は）。兄弟みたいな国という印象を抱きました。（高宮広土）

島嶼研だより　No.79　令和 2 年 3 月 23 日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html